

全国各地で病院や医師は足りているのか、地元の岡山エリアはどうか。データに基づき詳しく現状について語る松山正春先生

二次医療圏	総医師数
全国	304,759
岡山県	5,752
徳島県	3,245
香川県	1,864
高松市	36
高松市	79
岡山-東部	259
出典	医師会総研



医学部志望の生徒が一堂に会する講演会

12月半ばの屋下がり。校内の「国際ホール」に集まったのは、高校2年生から下は中学1年生までの総勢53名。医学に関心を持っていたり、すでに大学の医学部への進学を志していたりする生徒たちで、この人数は全校生の約4分の1に相当するというからすごい。講演会に先立ち、まず進学指導部長・平賀崇之先生から、講演を聞く上でのマナーや心構え、さらに常に問題意識を持って聞くことの大切さが伝えられる。拍手の中で講師陣が迎えられると、副校長・上田肇先生による挨拶が行われる。「医師は命に関わる仕事、覚悟のない者は目指すべきではない」と一喝。生徒たちの背筋がしゃんと伸びる。何事にもルーズさが極まりない昨今だからこそ、こうした礼儀や作法への徹底した姿勢が、同校の教育に対する厚い信頼と人気に繋がっているのだろう。

講演会は二部制となっており、第一部は岡山県医師会会長・松山正春先生による講演。高校時代は陸上部に在籍し、前回の東京オリンピック時には聖火ランナーの一人だったというエピソードが語られる。もちろん、今回のオリンピックでも聖火ランナーとして参加するとか。親族に医師はいたが、医学の道を特に強く志したわけではなかったと先生。それでも社会に役立つことがしたいとは心に決めていたという。生徒たちと近い距離間の中で、松山先生は詳細な表やグラフなどのデータに基づき、医師を取り巻く環境や現状について話された。

続く第二部は岡山県医師会副会長・清水信義先生。清水先生は長年にわたり岡山大学で教鞭をとられ、自身の在学期間を合わせると40年以上にわたって岡山大学および附属病院で勤められている。実際の医学生の様子や、基礎的な学問から臨床、診察スキルを高める

実習、そして医師国家試験へといった大学6年間で学ぶイメージを生徒たちからの目線でわかりやすく語られた。さらに、日本初を生体部分肺移植に関する画像を見せながら、当時の様子を語るなど、実際の医療現場をイメージできた生徒たちも多かったことだろう。



講演の後には何人かの高校生たちから、医療現場でのAI（人工知能）活用や、ゲノム編集によって生まれるデザイナーベイビーの可否についてなど、専門的な質問も出された。医学にはまだまだ未知なことも多い。医師として、あるいは医学研究者として歩みたいと願う生徒たちの未来は限りなく広がっている。

多感な時期だからこそ大切なものを「教育」という未来への種蒔き

<http://www.gakugeikon.ed.jp/seishu/>

岡山学芸館清秀



私立中高一貫校の学校生活取材についてよく感じるのは、「これくらいこんな道を歩んでみたい！」というはっきりと言える生徒たちに出会うことの多さ。彼らは、自分の興味や関心が何に向いているか、いま何のために学んでいるのかという目的意識を明確に持っている。

まずは、目の前の目標である第一志望大学に進学するために必要な学力、そしてその先の未来を切り拓くために欠かせない人間力……。

キャリア教育を考える時、私学は公立校を圧倒している。社会の様々な分野において、その第一線で活躍する多くの卒業生たち。さらに大学や大学院、名だたる企業の研究機関との連携教育など、ネットワークの広さと強さがすべてを物語っている。



1998年の夏に国内で初めて生体肺移植を行ったのが岡山大学で、その執刀にあたったのが清水信義先生。「肺胞って広げるとどれくらいになると思いますか」と問うと、うーんと考え込む生徒たち。「テニスコートの半分くらいもあるんですよ」との答えに、驚きの声があがる。「1960年代の高度経済成長期からタバコの消費量が増え、それに伴い肺がんが増えてきた」と先生。岡山県医師会では受動喫煙についての活動も積極的に行っている



撮影/岩井 進 (p.20~23)